

第3章 湯前町の概要

第1節 位置と沿革

(1) 位置

本町は、九州の中央に位置する熊本県南部の^{ひとよしし}人吉市から東へ約24km、人吉盆地の東端に位置する。町の総面積は48.37km²であり、北側は一級河川球磨川を挟んで水上村、西から南側は^{たらぎまち}多良木町、東は九州山地を隔てて宮崎県^{こゆぐんにしめらそん}児湯郡西米良村とそれぞれ接し、町の中心部から熊本市まで118km、宮崎市まで120km、鹿児島市まで110kmとなっている。

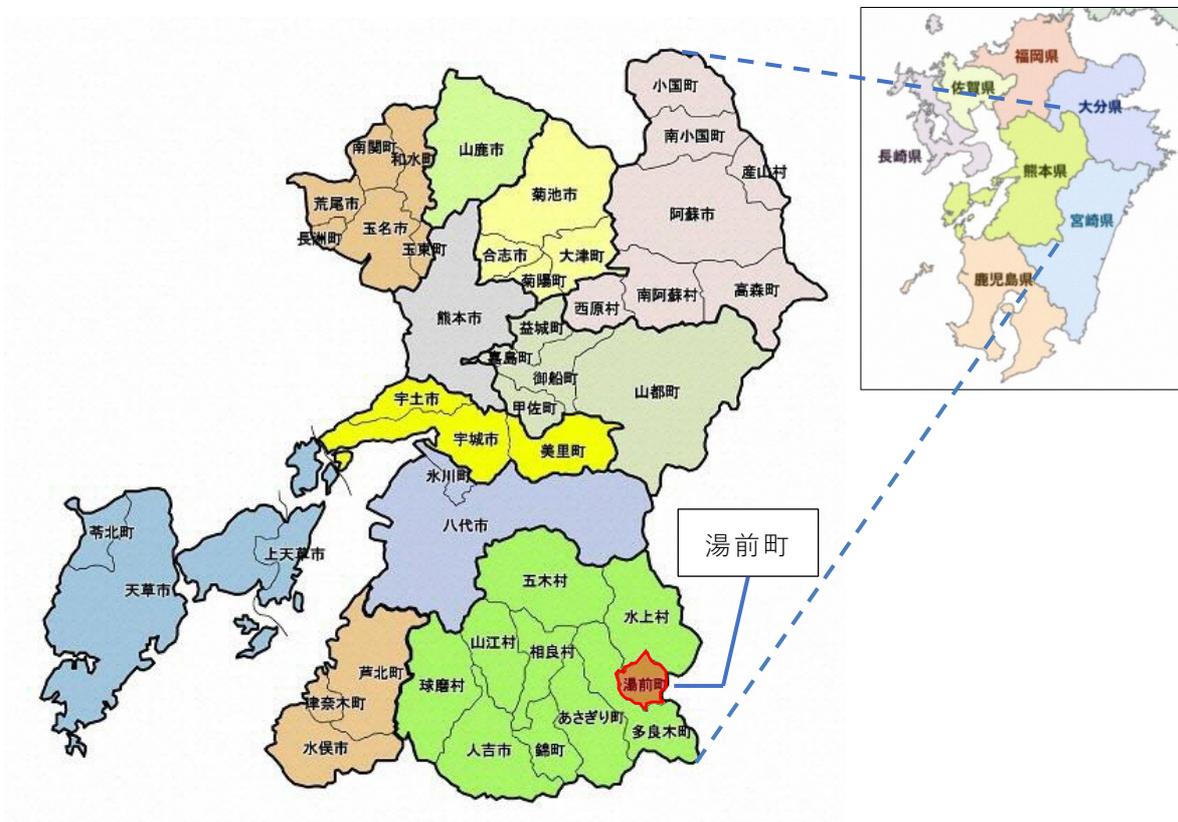


図3-1 熊本縣市町村位置図（熊本県HPより転写・加工）

(2) 町の沿革

『湯前町史』によると、古くは縄文時代に^{ふるじょう}古城台地に一大集落地があり、湯前氏の居城がおかれていたことから、台地の南崖下に湧き出る「井（イ）」といわれる泉群を中心に形成された「イノマエ」が転訛して「ユノマエ」となったと考えられている。現在も周辺の古城、下城区では湧き水が多く見られる。

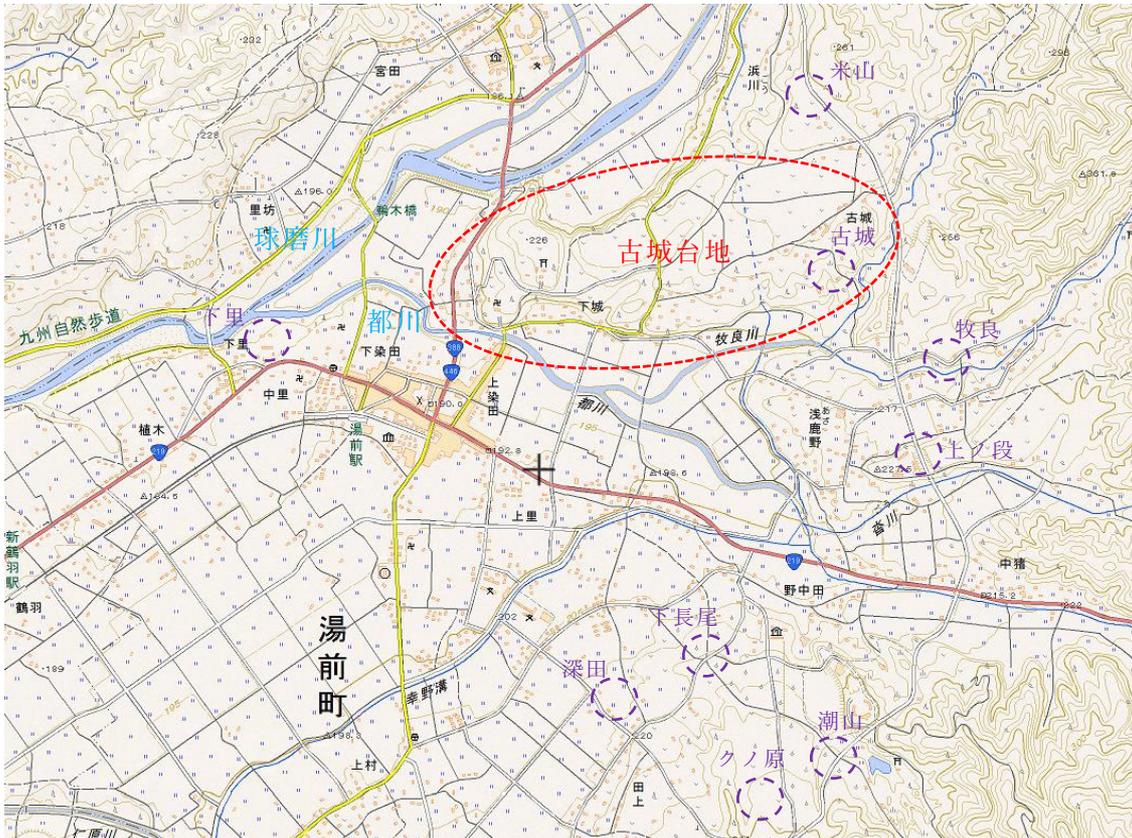


図3-2 古城台地と周辺の文化財包蔵地（国土地理院の電子地形図（タイル）に加筆して掲載）

古城台地は球磨川と都川に挟まれた三角形の台地で、湯前城跡を中心に市房山神宮里宮神社、普門寺観音堂など、人吉・球磨地域を長らく統治した相良氏に関する多くの文化財が現存している。また、この地域においては、旧石器から弥生にかけての文化財包蔵地が多数確認されており、町内でもクノ原、潮山、下里といった遺跡から人々の暮らしの痕跡が確認されており、現代に生きる私たちまで連綿と受け継がれている。

城跡や氏神的な位置づけの神社が創建された経緯も含め、生活や生産、信仰に深くかかわる湧水の地であった古城台地周辺は古くより湯前の中心地であったと考えられている。

歴史的資料に基づく湯前町の沿革としては、天和3年（1683）に岩野村が独立分村するまで、現在の水上村である湯山周辺を含め球磨川をまたぐ形での湯前村があり、後に寛政元年（1789）に幸野溝の開削とともに興隆した東方村が湯前村・久米村・多良木村に分割された際に、東方・二本柿・植木の湯前村編入を経て、また明治13年（1879）に地租改正が行われ、飛び地であった現あさぎり町の岡原村字切畑が離れ、明治22年（1889）の町村制施行により湯山村を分村して以降、現在と同様の集落形成となっている。

現在の湯前町が成立したのは、昭和 12 年 (1937) 4 月で、本町は町制施行以降市町村合併の実施はなく、現在の行政区域で町制施行後 80 年が経過している。

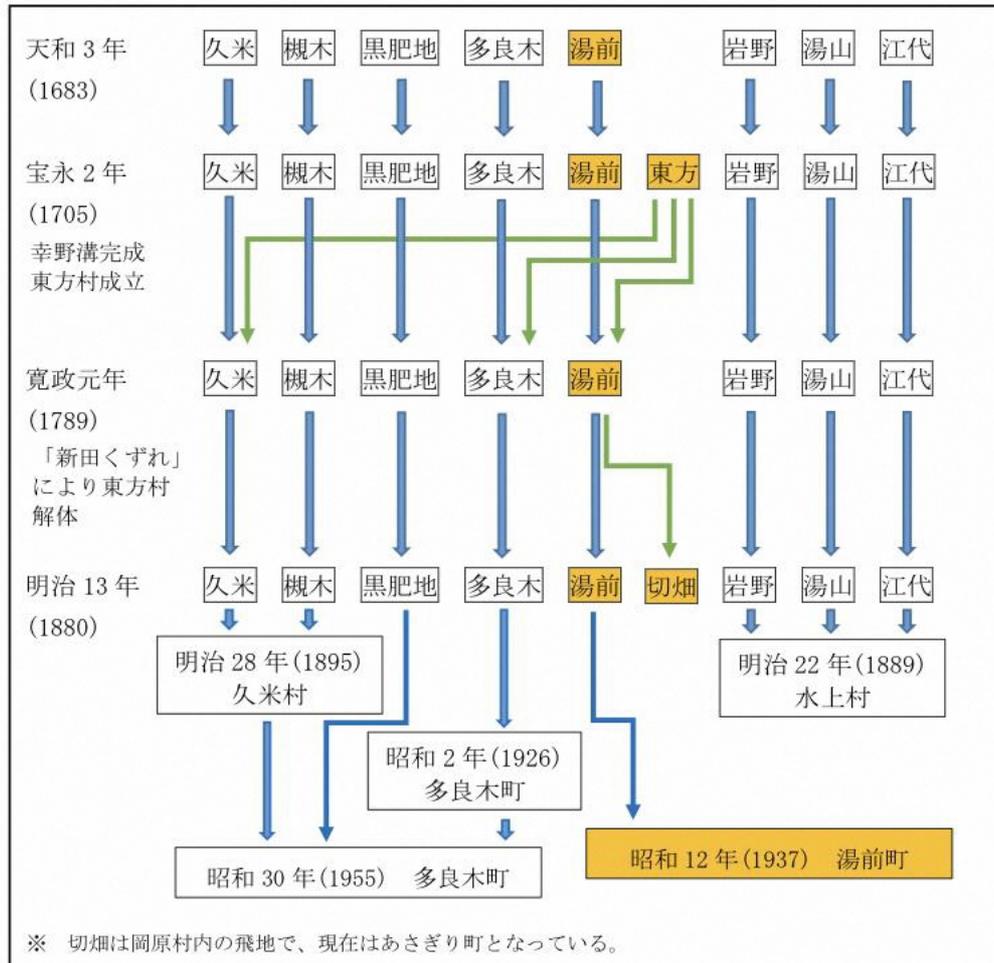


図 3 -3 湯前町の沿革

第 2 節 自然環境の特性

(1) 地形

本町の位置する人吉盆地は、九州地方の脊梁山地である九州山地のほぼ中央に形成された盆地で、熊本県では阿蘇盆地と並ぶ県内有数の規模を誇る。盆地はおおむね北東 - 南西方向を示しており、約 200 万年前から起こった地殻変動により九州の南西部が隆起、陸地化したことに起因する。周辺の山地は四万十帯の堆積岩によって形成され、盆地は鮮新世から更新世にかけての湖沼堆積物である人吉層や肥薩火山岩類が堆積し、さらに加久藤火砕流、阿多火砕流、阿蘇 4 火砕流、始良火砕流が堆積し、人吉層は最上部が 120 万年前とされている。

人吉盆地の地質構造については、昭和 55 年 (1980) に活断層研究会が「日本の活断層」の中で記載したのをはじめ、これまでその存在を指摘する学説が多く唱えられた。

平成 12 年 (2000) には、千田昇氏が空中写真により北東 - 南西方向の活断層を見出し、これを人吉盆地南縁断層と名付けた。さらに、盆地の北縁部にも新深田断層や高原 - 朝の迫断層などが見られる。こうした活断層の横ずれ運動により、引っ張りと落ち込みが生じた結果できた陥没地 (pull-apart basin : プルアパートベイズン) が球磨盆地の成因とされている。町内ではおもに南部から東部にかけて、こうした構造運動の痕跡を見ることができる。



写真3-1馬場付近の断層崖



凡 例

- 沖積低地
- 下位段丘面
- 高位段丘堆積物
- 砂岩優勢互層相
- 加久藤火砕流堆積物
- 砂岩相
- 泥岩相
- 町域
- 活断層
- すいてい活断層

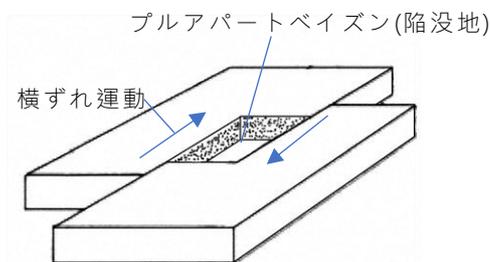


図3-4プルアパートベイズンの仕組み(模式図)

図3-5湯前町周辺の地質図

地元では以前から「この盆地は湖だった」という話が聞かれ、実際に人吉層の堆積地からは植物や淡水性カイメン、貝類や陸生昆虫、魚の咽頭歯（コイ目に見られる、喉に発達した歯）などの化石が産出している。

人吉盆地は標高 1000~1700m の山々に囲まれ、激しい寒暖の差や濃霧といった盆地特有の気候に加え、森林や河川といった自然環境が豊かであり、この地域における文化の醸成に大きく影響を与えた。また、戦乱期にあっては急峻な山々に囲まれ長らく外敵の侵入を阻みつけてきたことは、固有の文化圏形成を育んだ母体ともいえる地形条件となっている。

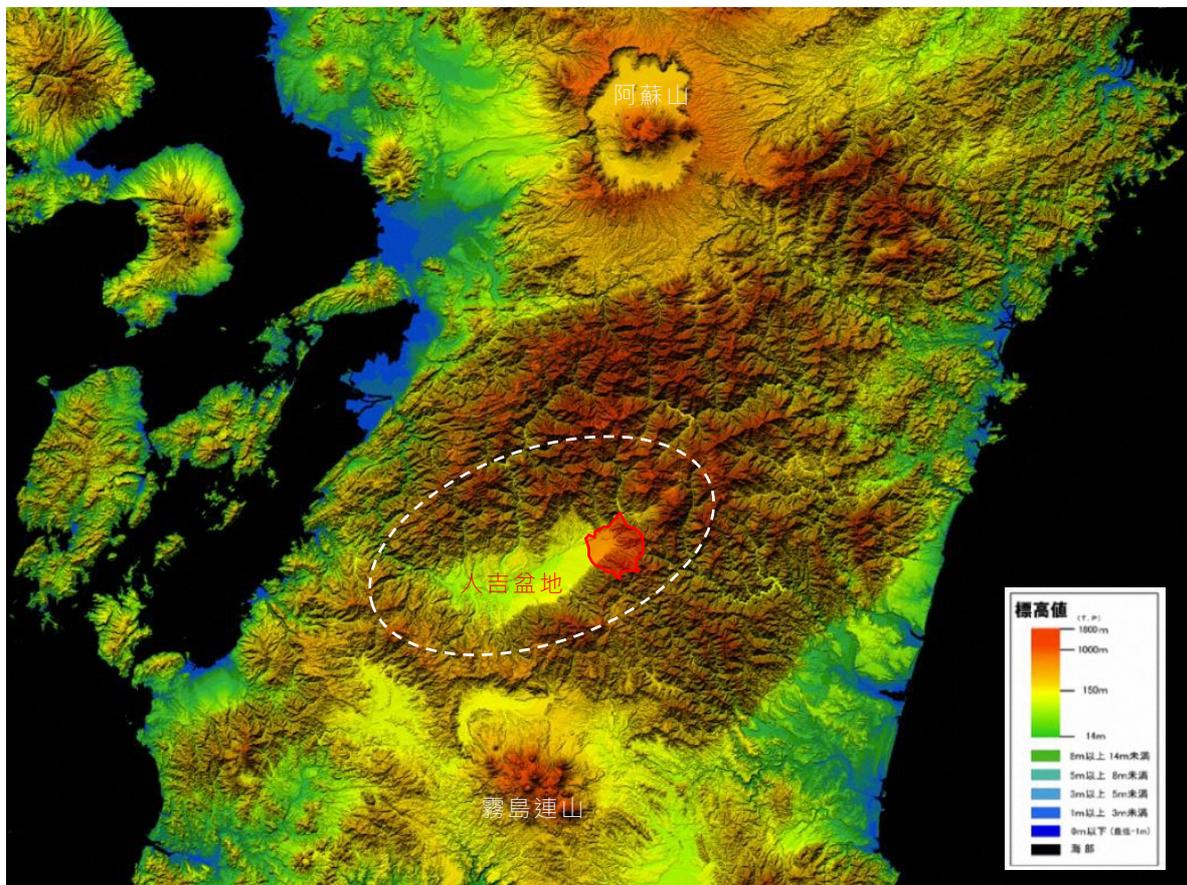


図 3-6 国土地理院の電子地形図 (タイル) に加筆して掲載

人吉盆地の東端に位置する本町の町域は球磨川左岸に位置し、大半が山地を占め、北から南側は牧良山(標高 991m)から湯ノ原山(標高 1,068m)を経て、花立山(標高 1,106m)に至る尾根部分が町村界、県境となっており、標高は平野部で概ね 200m、最高部となる花立山山頂で 1,106m となっている。また、本町北端の上流域に市房ダムが位置している。



図3-7 国土地理院の電子地形図（タイル）に町村界・山岳名等及び標高を追記して掲載



写真 3-2 町域西側より望む湯前町中心市街地

(2) 河川

本町の河川は球磨川水系であり、主な河川としては、町の北側から西側に流れる一級河川球磨川が水上村との町村界となっている。町中央部を東から西にかけて都川が横断しながら球磨川に合流し、南側で久米川内川が多良木町との町村界となっている。

町北側より、夜狩内川、宮の谷川、牧良川、沓川、竹の谷川、横谷川、都川、蓑谷川、

にはら
 仁原川及び南側の久米川内川上流域が砂防指定地となっている。また、都川の上流に位置する蓑谷川中流域には、昭和 16 年（1941）築造の蓑谷ため池があり、総貯水量 11 万 m³、下流域約 90ha の農地を受益面積とする農業用水利施設となっている。

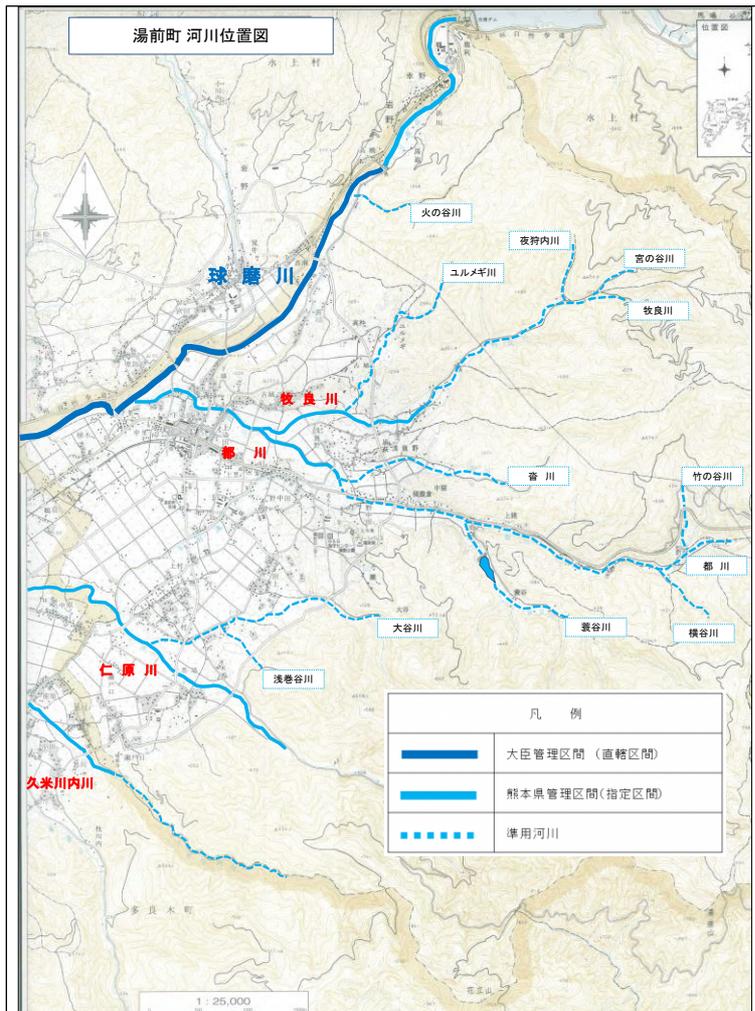


図 3-8 河川位置図



写真 3-3 球磨川と市房山



写真 3-4 都川と下町橋（石橋）



写真 3-5 蓑谷ため池

（3）気 候

本町及び隣接する多良木町、水上村を含めた 3 町村は上球磨地域に区分され、夏は暑く雨が多い。冬は朝の冷え込みが厳しく、降水量は少ない。気象データを平成 22 年(2010)から平成 26 年（2014）の平均値で見ると、気温は平均 13℃、最高 37.5℃、最低 -9.2℃であり、降水量は年間 2,336mm となっており、夏は高温多雨、冬は寒冷少雨な気候が特徴である。

また、山々に囲まれた人吉盆地は内陸型気候で昼夜の寒暖の差が激しく、そのため秋から春にかけて盆地全体が霧に包まれる地域独特の景色が現れ、多い年では年間100日以上朝霧が発生することもある。

□ H22～26年平均 上球磨地方気象（気温） （資料：上球磨消防署観測）

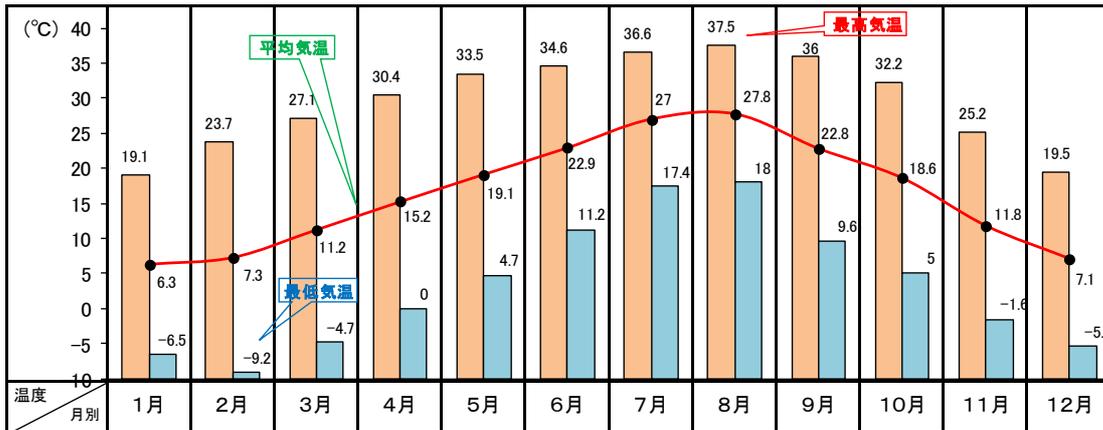


図 3-9 上球磨地方気象（気温）

□ H22～26年平均 上球磨地方の降水量 （資料：上球磨消防署観測）

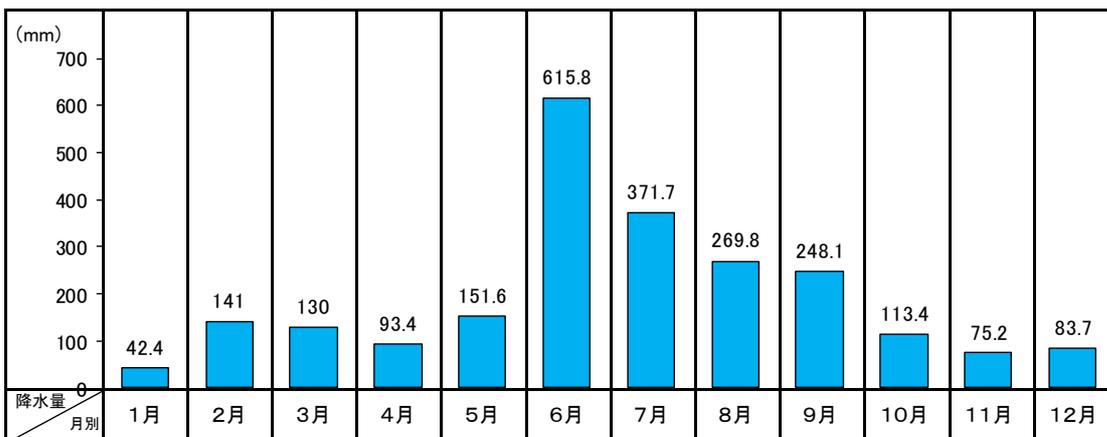


図 3-10 上球磨地方の降水量

（4）動植物

熊本県が作成した『生物多様性くまもと戦略』によると、人吉・球磨地域にはニホンカモシカをはじめヤマネやニホンヒキガエル、ナナフシやゴイツバメシジミなど、多種多様な動物が生息している。特にニホンカモシカについては、本町を含む熊本県の水上村から錦町にかけてと宮崎県の西米良・椎葉両村にまたがるエリアが、大分・熊本・宮崎県境の祖母・傾山系な

どと並ぶ九州での有力な生息域となっている。また、ヒメヒミズやコウモリ類、ニホンモモンガなどの希少種も生息し、晩秋から冬にかけてはナベヅルやマナヅル、コウノトリが時折飛来する。他方、ニホンジカやニホンザル、イノシシなどの個体数や分布域が著しく増加・拡大したことにより、深刻な農林業被害を引き起こしている。特に、ニホンジカの食害はシダ植物をはじめとした林床植物全般に及び、生物多様性の保全に大きな影響を与えている。



写真 3-6 ニホンヤマネ



写真 3-7 ナナフシ



写真 3-8 ニホンヒキガエル



写真 3-9 飛来したコウノトリ

植生は、標高 700m 付近までの範囲に常緑広葉樹のシイ・タブ林やウラジロガシ林などが、その上部の 1,000m 付近までの範囲には常緑針葉樹のモミ・ツガ林、1,000m 付近より上には落葉広葉樹のブナ林などが発達し、高い山頂付近にはノリウツギなどの低木林が形成されていたと考えられる。山地の渓谷沿いにもチドリノキ、サワグルミ、シオジ、ケヤキなどの渓谷林が成立していた。また、本町はヤマハンノキ植生の南限であることから、「^{へび}谷^{たに}低層湿原群落」として町天然記念物となっている。

しかし、長い人間活動の結果、これらの自然植生の多くは消失し、現在では各地に断片的に残っているにすぎない。替わって、農耕地、スギ・ヒノキの人工林、竹林、シイ・カシ林、コナラ林などの人為的に成立した植生（代償植生）が広く見られる。

第 3 節 社会環境の特性

(1) 人 口

本町の人口は、昭和 30 年(1955)の 9 千人弱をピークに年々減少を続け、平成 29 年 12 月末 (2017)の住民基本台帳人口で、1,633 世帯 4,030 人となっている。人口の自然増減については、出生数が死亡数を下回る「自然減」が続いており、社会増減については、平成 10 年 (1998)以降、転出数が転入数を上回る「社会減」の年が多くなっている。

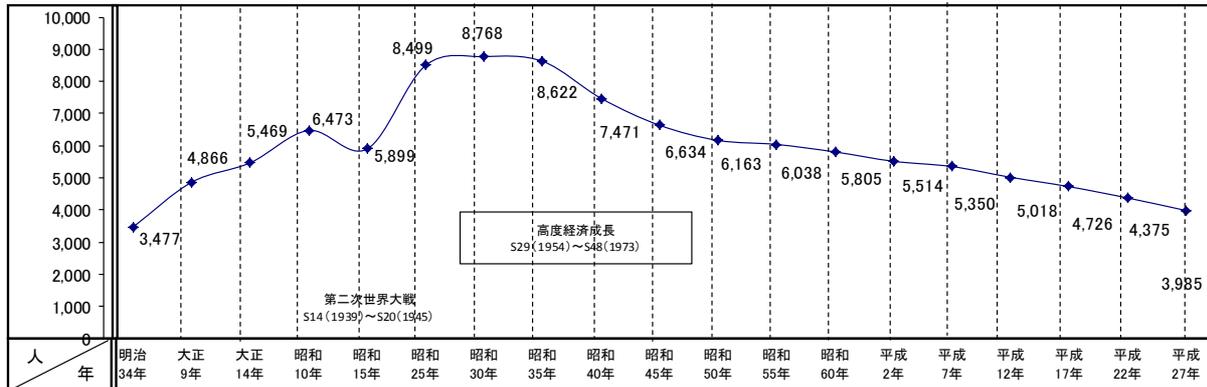
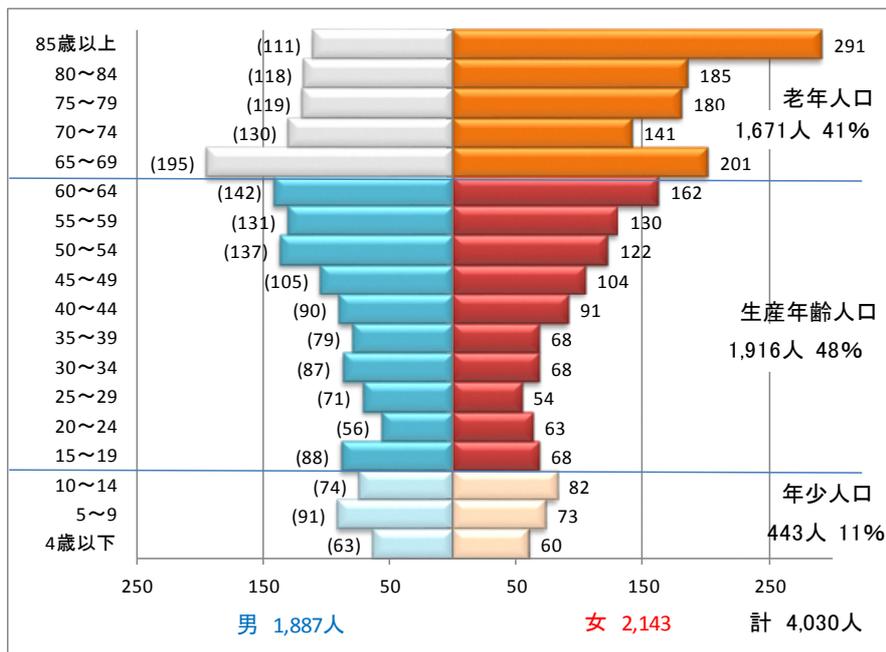


図 3-11 総人口推移 (資料：国勢調査)

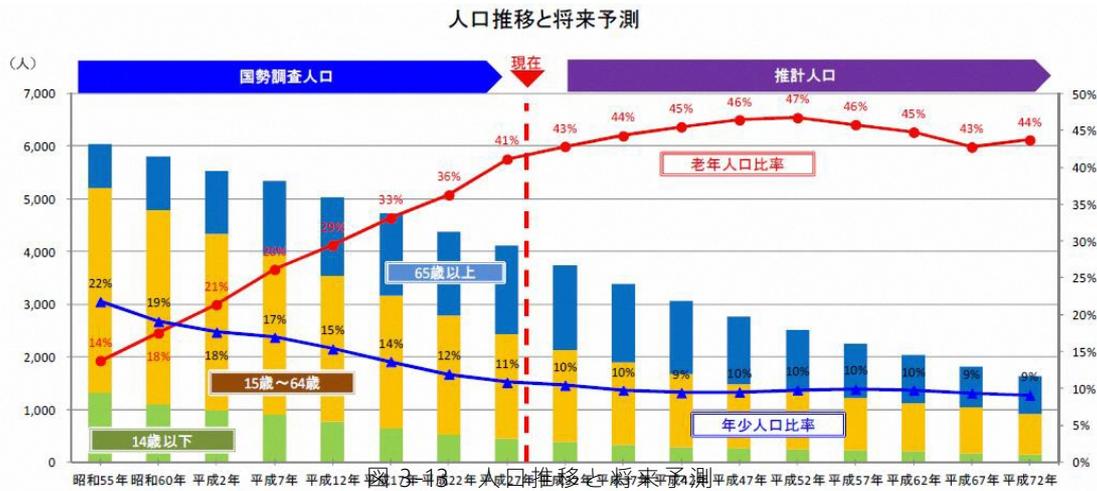
年齢 3 区分別人口の推移として、生産年齢人口・年少人口は昭和 40 年 (1965) 以降減少が続いている。一方で老年人口は昭和 40 年 (1965) 以降増加が続いており、平成 2 年 (1990) には年少人口を上回ったが、近年は増加傾向が弱まっている。



年齢 3 区分：年少人口…15 歳未満、生産年齢人口…15 歳以上 65 歳未満、老年人口…65 歳以上

図 3-12 平成 29 年 (2017) 12 月時点の人口ピラミッド

国立社会保障・人口問題研究所の人口推計を用いた将来推計においては、年齢 3 区分すべてで人口が減少すると見込まれ、2035 年には総数で 3,000 人を割り込むと推計されている。



(2) 交通

本町の道路網は、町中央部を東から西側にかけて国道 219 号が横断し、大分県佐伯市から宮崎県椎葉村を通る国道 388 号が町中心部で国道 219 号に接続している。町内では主要地方道 県道錦湯前線、一般県道幸野染田線、西の園中里線が主要な県道となっている。

国道 219 号は、人吉藩が参勤交代の際に現在の宮崎県西米良村を越えて日南や日向にいたる「米良往還」に沿うように通っており、周辺には休憩所（御茶屋、御飯屋など）が整備されていた。また、国道 388 号付近は藩主相良氏をはじめ、領民が市房山へ参詣する「お嶽さん参り」の経路ともなっていたことから、重要な交通の結節点となっていたことがうかがえる。

また、指定等文化財への経路としては国道 388 号と国道 219 号を中心に、町南部地域に至る町道浜川中猪線、向田上社線のほか、県道錦湯前線からつながる町道東方線が主要な町道となっている。

国・県道以外の道路網は、昭和 30 年代からのいわゆる高度経済成長期より、農業基盤整備に係る圃場整備事業や農業構造改善事業等と共に路網整備が進み、平成 28 年度末（2017）で町道 123 路線 92 km、農道 222 路線 51 km の合計 143 km が整備されている。

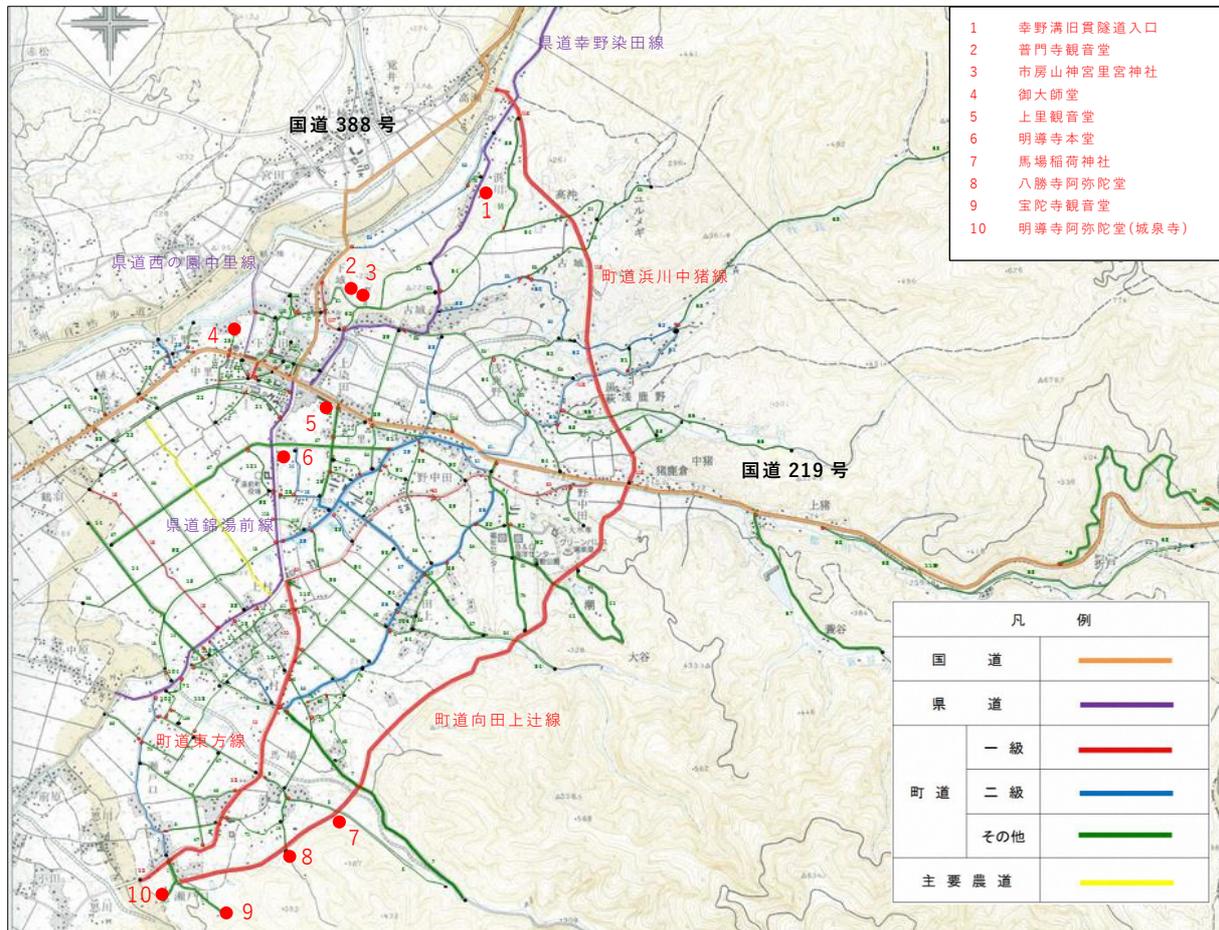


図 3-14 湯前町道路網図

本町の公共交通機関には、主なものとして人吉市からの鉄道（くま川鉄道）及び路線バス（九州産交）がある。

湯前駅は大正 13 年（1924）に開業した国鉄湯前線から平成元年（1989）に第三セクターへ転換したくま川鉄道の東の発着駅であり、当初は宮崎県へ乗り入れる計画であったが、昭和 52 年（1984）に宮崎県側が廃止されたことに伴い、平成 8 年（1996）から西米良村営バスが湯前駅前まで乗り入れるようになった。

湯前駅は 1 日あたり 200 人程の乗降者数であるが、駅舎が国の登録有形文化財ともなっており、平成 25 年（2013）からの観光列車運行などの効果と相まって、沿線の主要駅で唯一乗降者数が増加し、週末を中心に駅周辺で賑わいをみせる。

路線バスは、人吉市及び水上村からそれぞれ町内を通る路線があり、町内では国道 219 号及び国道 388 号を通っている。

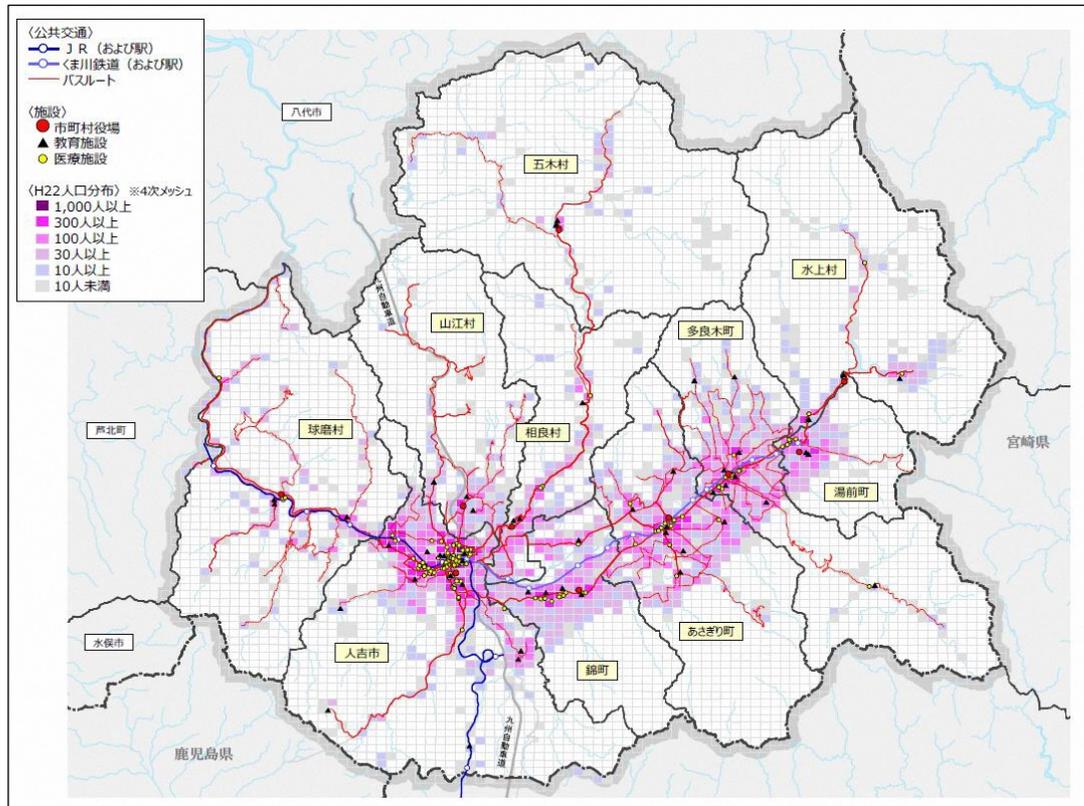


図3-15 人吉・球磨地域の交通網 (人吉・球磨地域公共交通網形成計画 (2016) より転写)



写真 3-10 くま川鉄道



写真 3-11 湯前駅周辺

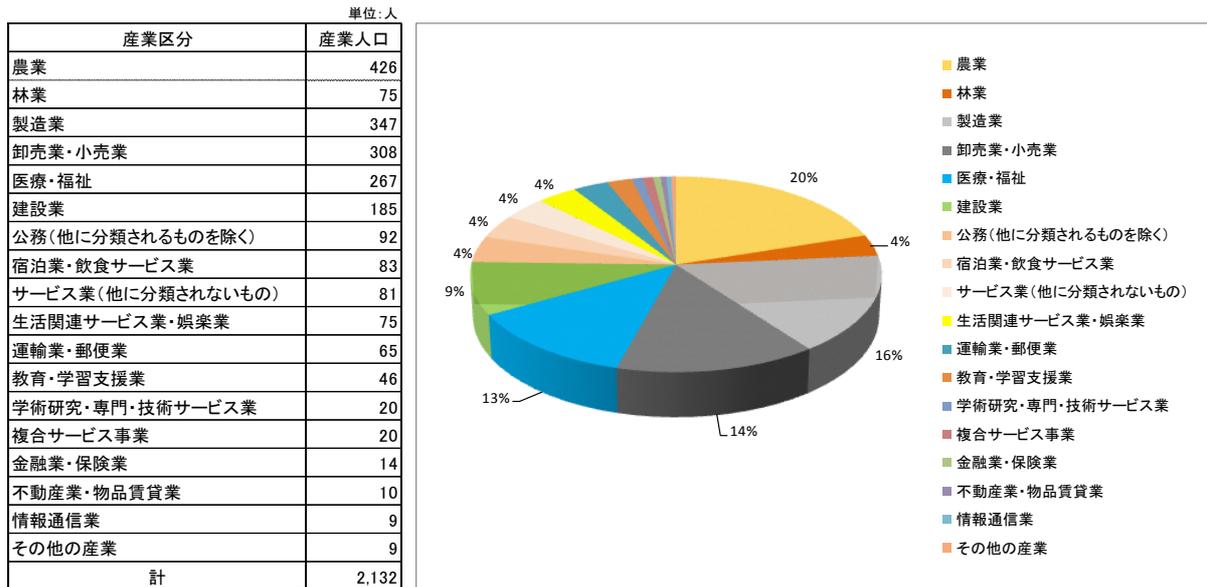
(3) 土地利用

本町は、総面積 48.37 k²、標高 250mの等高線を境として、平野部と山間部に大きく二分されている。全体の約7割強を占める山間部は森林であり、国有林主体の奥山が 2,187ha、民有林主体のすそ野が 1,414ha となっている。平野部は、急傾斜地から発達した台地と球磨川河畔から広がる低地により構成され、利用用途別には、農用地面積が約 14.1%の 684ha、宅地が約 3.0%の 145ha となっている。

(4) 産業等

① 産業別就業人口

本町の産業別就業人口（大分類）を見ると、基幹産業である農業が最も多く、約 1 / 5 を占めている。次いで製造業、卸売業・小売業、医療・福祉、建設業の順となっている。



図表 3-17 産業別就業人口（平成 22 年（2010）国勢調査）

② 農 業

本町の農業は、気候と立地条件を生かして稲麦を主体とする農業生産を展開してきたが、近年では、農業経営の発展を図るため、いちごやメロン、ぶどうや花き等の施設園芸の導入が進んでいる。本町の農業構造については、昭和 40 年代から人吉市における工業団地の立地を契機として兼業化が進み、恒常的勤務による安定兼業農家が増加している。

また、本町の農地は、江戸時代の新田開発も関係し、水田 566ha、畑地 118ha と 8 割以上を水田が占めており、水田の作付けでは、うるち米栽培が中心であるが畜産業の進展もあり、発酵粗飼料用稲の作付面積が増加し、併せて酒米の栽培も増加している。

平成 27 年度（2015）の農産物生産額では、米・麦・大豆等が 340 百万円、その他野菜等が 303 百万円となっており、その他野菜の内訳としては、生産額順に、いちご、花き（菊）たばこ、メロン、きゅうり等の生產品目となっている。また、水田の飼料作物転作にも見られるように畜産業も盛んであり、50 戸弱の畜産農家が黒毛和牛の繁殖、肥育を行い、本町の品目別農業生産額でトップを占めている。一方で、農産物生産額の総額においては、平成元

年（1989）の約 1,907 百万円から年々減少しており、平成 27 年度（2015）で 1,167 百万円と
なっている。

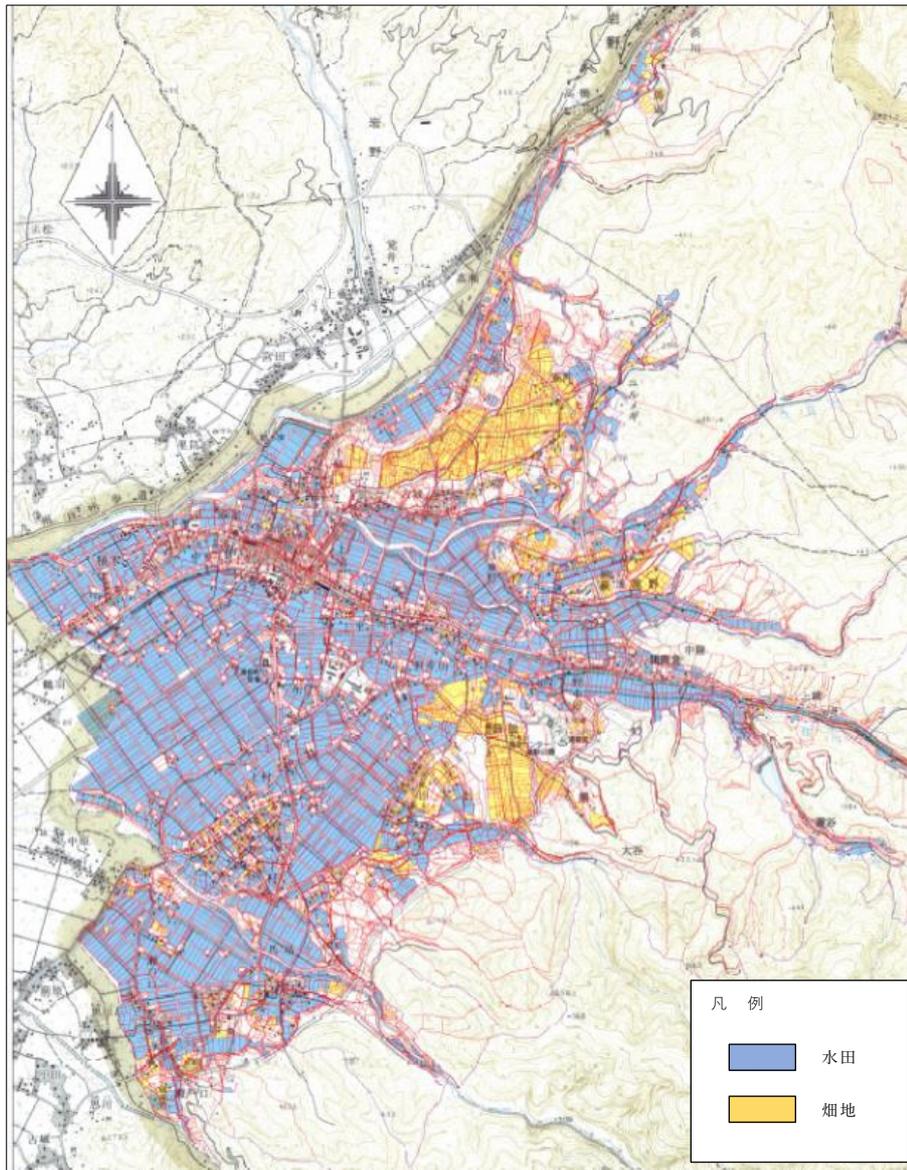


図 3-18 農用地分布図

表 3-2 農家人口、農家数等の推移

◆農家人口、農家数、経営耕地面積等の推移(総農家)

(資料:農林業センサス)

区 分	農家人口(人)			農家数(戸)					経営体経営耕地面積(ヘクタール)			
	男	女	総数	専業	兼業			総数	田	畑	樹園地	総数
					総数	第一種	第二種					
昭 和 55 年	1,451	1,526	2,977	153	522	226	296	675	537	70	38	645
昭 和 60 年	1,280	1,349	2,629	116	474	140	334	590	504	68	41	613
平 成 2 年	1,153	1,210	2,363	105	425	93	332	530	513	62	37	612
平 成 7 年	1,057	1,099	2,156	102	399	86	313	501	507	64	30	601
平 成 12 年	1,026	1,110	2,136	90	411	54	357	501	502	58	21	581
平 成 17 年	914	977	1,891	88	387	50	337	475	453	43	16	512
平 成 22 年	612	656	1,268	90	359	35	324	449	449	51	14	514

※平成22年農家人口は、販売農家人口

③ 林業

本町の林野面積は 3,601ha で町面積の約 74% となっている。山林の保有形態は、国有林が 2,187ha で林野の約 60% を占め、以下、民有林 1,414ha などからなる。民有林の一般地勢は、市房山から花立山、白髪岳^{しらがたけ}に連なる九州山地中腹以下の山麓を占め、林業経営に適しており、スギ・ヒノキを主体として、人工林率約 90% であり全国平均の 41% を大きく上回っている。

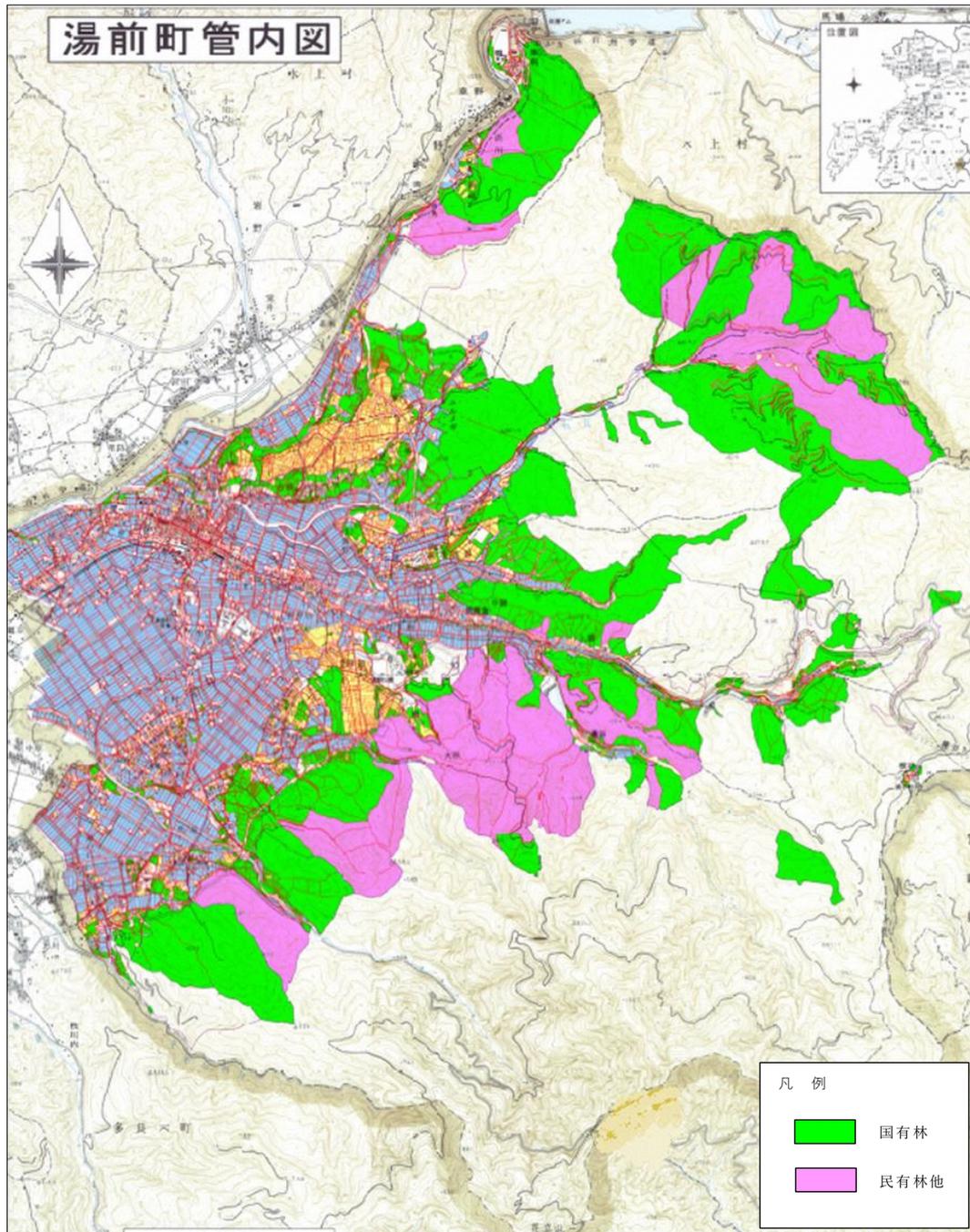


図 3-19 民有林区分図

本町の林業木材産業の特徴として、公有林が 800ha あまりとなっており、昭和 20 年（1945）の小学校卒業生による記念植林をはじめ、昭和 25 年（1950）からの成人式、昭和 28 年（1953）からの還暦者といった人生の節目での記念植林による再造林が続けられており、町基本財産の造成を地域住民で支えてきたと共に、林内路網の整備など身近に感じられる美しい森林整備に努めている。

また、これらの豊富な森林資源を背景として、原木市場や製材所などの木材産業施設も町内各地に所在している。

近年は、熊本県の「企業と協働の森づくり協定」制度を活用し、平成 21 年（2009）より日本たばこ産業株式会社と、平成 23 年（2011）には株式会社紅中と公有林の森林整備に関する協定を締結し、植林や保育作業などの森林保全活動を通じた企業と地域との交流を深めており、これらの活動が評価され、平成 28 年度に「ふれあいの森林づくり」活動部門で国土緑化推進機構会長賞を受賞している。



写真 3-13 平成 29 年度成人者記念植林



写真 3-14 企業共同の森づくり活動

④ 工 業

本町の工業を取り巻く環境は、長引く不況と経済のグローバル化などにより、人件費等のコスト削減を求めて国内製造業の生産拠点が次々に海外へシフトするなど地域経済に与える影響も大きく、その対応に苦慮する地域立地の企業も年々その数が減少している。

そのような中、本地域の代表的な伝統産業である球磨鍛冶くまかじにおいて、2 件の工房が明治時代から操業しており、農林用から家庭用まで、さまざまな種類の製品を製作している。

⑤ 商 業

本町の商業においては、商圈人口の減少、ライフスタイルや顧客ニーズの多様化、近隣市町村への大型店舗の出店など、商業を取り巻く環境が年々変化している。

小規模な本町の事業者は、消費の流出に伴う小売店の衰退に加え、経営者の高齢化や後継者不在などの影響から商店数は年々減少し、平成 11 年度には、商店数 91、従業員数 295 名、年間商品販売額、406 千万円だったものが、平成 26 年度には、商店数 60、従業員数 209 名、年間商品販売額、325 千万円まで減少している。

特に、大正 13 年（1924）の鉄道開通にはじまり戦後の経済成長と共に発展した里宮通りの染田商店街や中里商店街といった中心部の商店街は、近年の人口減少とともに店舗数も大きく減少している。



写真 3-15 昭和中期中里商店街



写真 3-16 現在の中里商店街

⑥ 観 光

本町には、豊かな自然環境に加え、「日本遺産」構成文化財の社寺等や、湯前まんが美術館といった観光資源のほか、温泉施設である「ゆのまえ温泉湯楽里」が主要な観光施設となっている。

熊本県観光統計によると、宿泊客については、年ごとに多少の増減があるものの、おおむね増加の傾向となっており、特に日帰り客については、「ゆのまえ漫画フェスタ」や「潮おっぱい祭り」をはじめとした各種イベントの定着に加え、相良三十三観音巡りの参拝者数増加や観光列車の運行等もあり、平成 16 年（2004）からの 10 年間で、およそ 10 万人の増加と大きな伸びを見せている。



写真 3-17 奥球磨ゆのまえ温泉湯楽里



写真 3-18 湯前グリーンパレス公園



写真 3-19 湯前まんが美術館

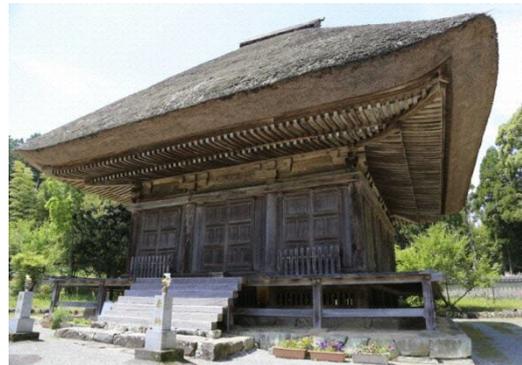
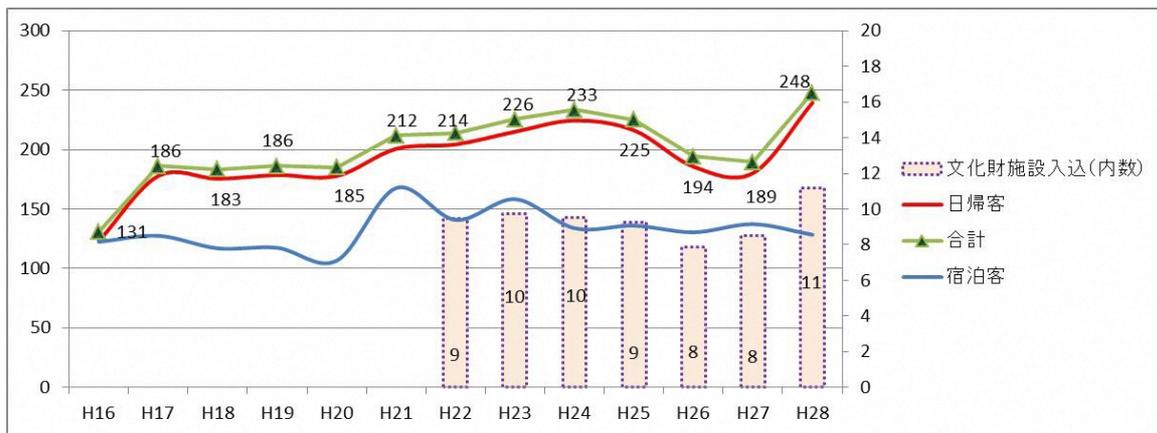


写真 3-20 明導寺阿弥陀堂（城泉寺）

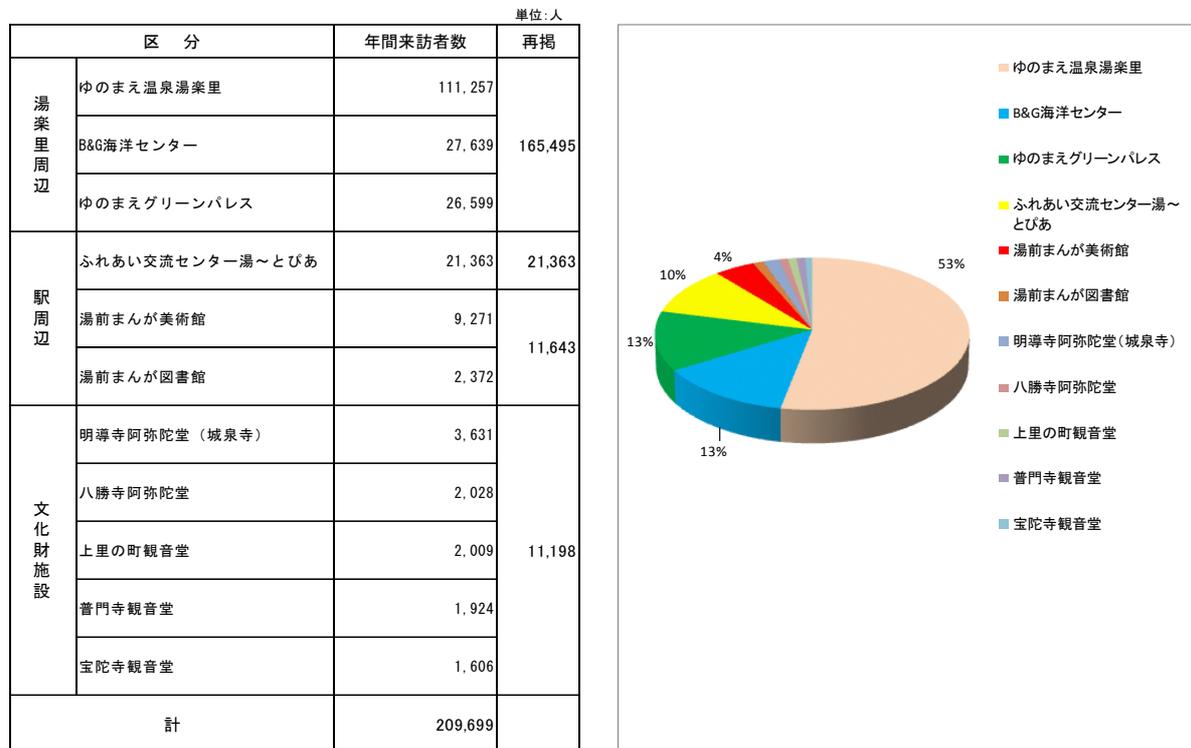


単位：千人

区分	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28
宿泊客	8	9	8	8	7	11	9	11	9	9	9	9	9
日帰客	123	178	175	179	178	201	204	215	224	216	186	180	239
合計	131	186	183	186	185	212	214	226	233	225	194	189	248
文化財施設入込(内数)							9	10	10	9	8	8	11

図表 3-20 湯前町観光入込数推移 (出典：熊本県観光統計)

※H25・26の数値では、八勝寺阿弥陀堂の復原工事に伴い1千人程度の一時的に落ち込みがあった。



図表 3-21 平成 28 年（2017）施設毎の観光入込数（出典：熊本県観光統計調査）

本町を含む人吉・球磨地域の観光客数は、日帰り客数 2,928 千人、宿泊客数 247 千人であり、平成 27 年 4 月の日本遺産認定を受け、青井阿蘇神社（人吉市）や相良三十三観音札所（人吉・球磨全域）への参拝客が増加したことや、鉄道ミュージアム（人吉市）等の新たな観光施設の開設により、対前年比 101.8%の微増となっている。

また、熊本県全体での外国人宿泊客数は、平成 27 年（2015）に 644 千人で過去最高となっており、国別の割合では、韓国 42%、台湾 23%、中国 11%と続き、全体の約 8 割がアジア圏からの入込となっている。平成 28 年熊本地震は観光入込に大きな影響を与えたが、本町においては、日本遺産認定や震災復興プロジェクトが大きく影響し、対前年増 5 万 8 千人で過去最高の 24 万 8 千人が訪れている。

本町の観光統計調査対象施設の内、重要文化財の明導寺阿弥陀堂（城泉寺）や八勝寺阿弥陀堂、相良三十三観音巡りの対象となっている普門寺観音堂といった歴史的建造物への観光入込は年間 1 万人弱で観光入込全体に占める割合は 5%程度となっている。

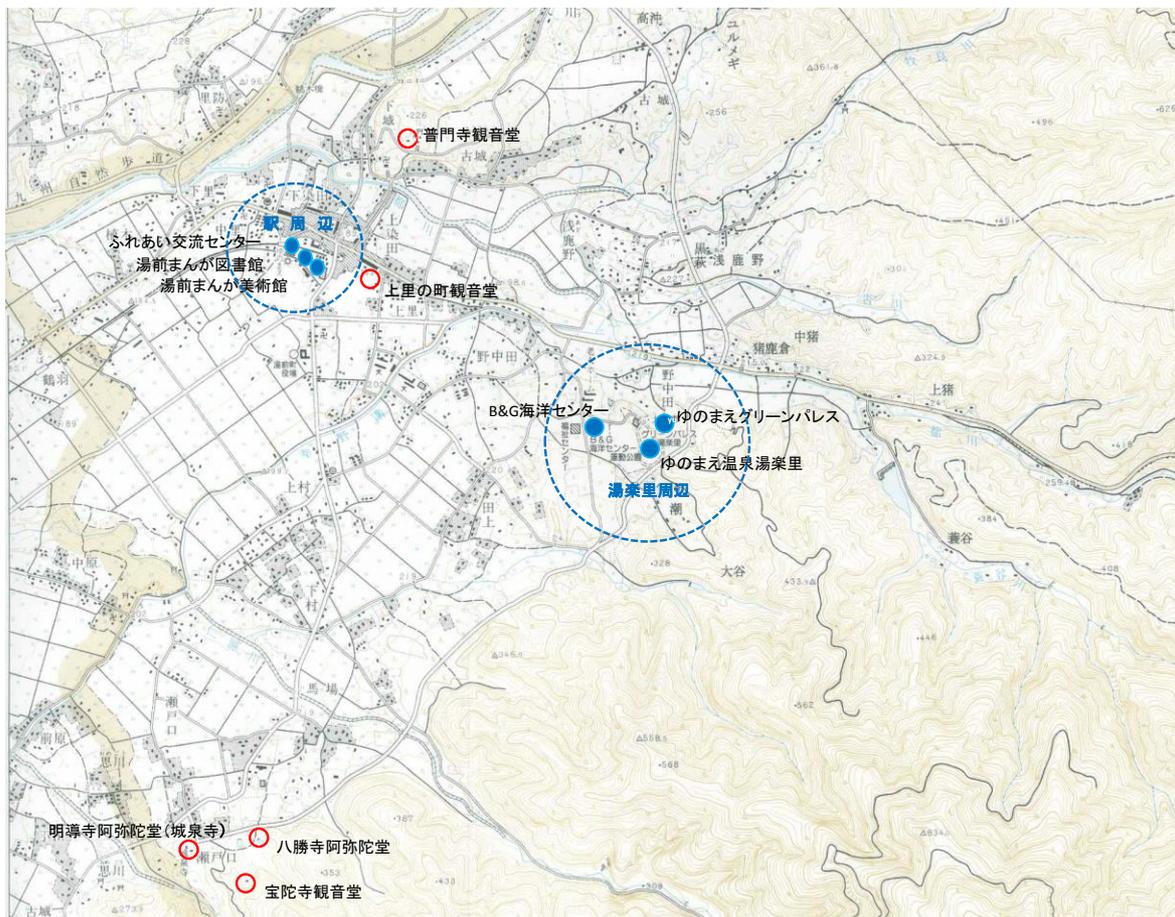


図 3-22 町内の主要な観光施設

第 4 節 文化的な特性

(1) 旧石器時代

人吉・球磨地域は、熊本県内でも有数の旧石器時代の遺跡の密集地帯として知られている。特に九州縦貫自動車道関連工事に伴う発掘調査が行われた 1980 年代後半以降、調査報告書の刊行とともに全国的に注目されることとなった。本町では潮神社の周辺に位置する潮山・クノ原遺跡は代表する旧石器時代の遺跡となっている。

広域農道建設に伴い、平成 8 年度 (1996) から 9 年度 (1997) にかけて熊本県による調査が行われた際、当時は九州初といわれた石器や石材の集中部 (ブロック) が認められ、それらが環状に分布するいわゆる「環状ブロック」を検出した。また、スクレイパーやナイフ型石器なども多く出土した。遺跡の環状ブロックは直径約 20m で、全国的にみると中規模なものに分類される。

旧石器時代に少人数のグループで移動生活を行っていた人びとが一時的に集合している状況から、大型動物等を狙った大人数による大規模狩猟や解体を行った際のキャンプ地としての痕跡を示すものと考えられる。

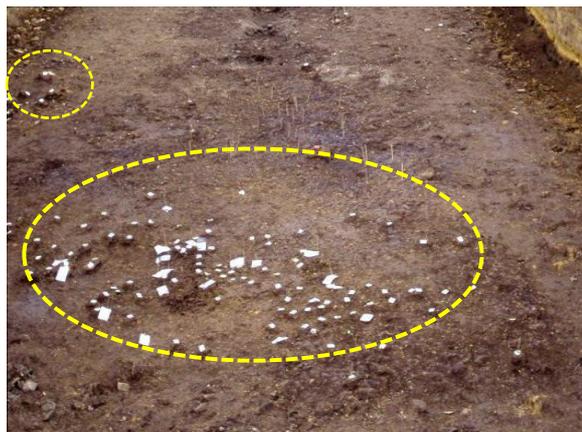


写真 3-21 クノ原遺跡より出土した集中部

また、恒常的な「ムラ」が形成される以前の一時的な集合の場を開いた例とみなし、共同社会の一形態として位置付ける考え方もあるが、本町でも古くから人々の生活が営まれていたことを示すひとつの痕跡と見ることができ、湯前の歴史のはじまりともいえる重要な遺跡である。

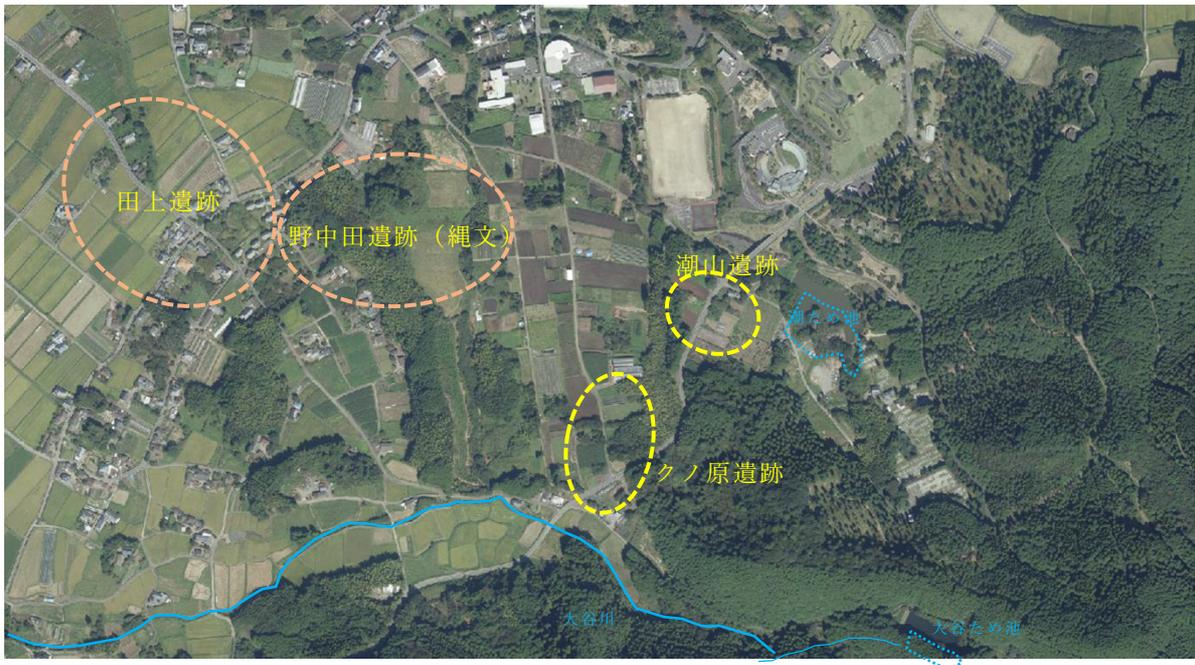


写真 3-22 潮山・クノ原遺跡周辺の包蔵地等

(2) 縄文～古墳時代

人吉・球磨地域における縄文時代の特徴として、縄文時代草創期から早期にかけての遺跡確認数の多さを挙げることができる。

その要因としてこの地域での火山灰の発達、特に鍵層となる約 7,300 年前の鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah) の堆積という条件により、下位の遺跡の保存状態が良好であったことが考えられる。

この時代の遺跡としては、本町では潮山・クノ原の両遺跡から主に縄文早期以降の石器が出土しており、石材としては、黒曜石、安山岩、チャート、黒色珪質頁岩こくしょくけいしつげつがんが使用されていたことがわかっている。

このうち黒色珪質頁岩は、遺跡の北側を流れる大谷川の河床などに産出することから、比較的容易に入手できたと考えられる。また、大谷川には鉱泉が存在し、現在の鉱泉地点は潮



写真 3-23 大谷川より産出する黒色珪質頁岩

溜池の中にあるため確認できないものの、戦前頃までは鉱泉を沸かした湯治場として明治期まで賑わいをみせていたといわれている。

ほかにも、米山遺跡からは宮崎県を中心に出土する後期の綾式土器が出土し、東方遺跡では石製の玦状耳飾が出土しているほか、長尾、下辻、浅鹿野の各遺跡からも、縄文時代の遺物が確認されている。

弥生時代は、下里、上ノ段、下辻の各遺跡があり、これらの遺跡では、戦前より耕作の際などに、打製石鏃をはじめとした多くの遺物が出土していたという。



写真 3-24 東方遺跡より出土した

古墳時代に入ると、町内でも浅鹿野や東方に古墳が造られていったが、石室や墳丘などは後世の耕作や開発ですでに破壊されたとみられ、副葬品の有無を含め詳しい構造などは分かっていない。

(3) 奈良～平安時代

奈良時代の承平年間(931～938)に^{みなもとのしたごう}源順により編纂された『^{わみょうるいじゅしょう}和名類聚抄』によると、球磨郡には六か所の郷(久米、球磨、人吉、東村、西村、千脱)がおかれ、本町域は久米及び東村郷に含まれていたと推定される。神仏の造像活動が全国的に盛んとなった平安時代には、人吉・球磨地域もその流れに入っていた、

この頃の地域における造像の特徴は、武神である毘沙門天が多く見られることで、同じ九州で太宰府の四王子山に四天王像を祀り、新羅に対する防御の意味を込めていたように、郡単位では領域や境界の守護、とりわけ隼人からの防御を意図してのものであったとの指摘もある。本町では下里地区に位置する御大師堂の毘沙門天立像や、馬場の八勝寺阿弥陀堂の天部形立像が平安後期の作として知られている。

(4) 鎌倉時代

元暦2年(1185)、壇ノ浦で平家が滅びると、最後の拠点であった九州は幕府の預かりとなり、それ迄の球磨御領は再編され、蓮華王院領の人吉荘(下球磨)、関東御領(中球

磨)、公領(上球磨)となった。のちに上球磨では相良頼景さがらよりかげが多良木を領地とし、子の長頼ながよりは人吉荘地頭職となった。こうした相良氏の台頭は、それまで平河・須恵・久米といった在地の有力豪族が勢力を誇っていた人吉・球磨地域にも中世の波が訪れたことを示している。

また、本町の歴史的環境を語るうえで鎌倉時代は重要な時代のひとつである。その特徴として、後に江戸時代に新田開発によって成立する「東方村」ひがしかたむらの一部となる現在の馬場・瀬戸口・辻地区を中心とした中世仏教文化の興隆を挙げることができる。

6世紀中頃に日本に伝えられた仏教は、鎌倉時代以降庶民にも親しまれるものとなり、肥後の地にも浄土真宗(13世紀前半)をはじめ臨済宗、曹洞宗の禅宗(13世紀後半)などが伝えられると、在地の豪族たちにも受け入れられていった。

人吉・球磨地域では、初代相良長頼が建久9年(1198)に遠江国(現在の静岡県)相良庄から下向した時、もしくは建久4年(1193)の長頼の父相良頼景が罪を得て多良木村に流された際にこうした仏教文化がもたらされたといわれ、以後相良氏は人吉の矢瀬氏や中球磨の平河氏といった有力者を平定したと同時に、これら有力者に関連する社寺を保護もしくは建立することにより、この地域での権力基盤を固めていった。こうしたことにより人吉・球磨地域には特徴的な仏教文化圏が形成され、現在も多くの古社寺建築や彫刻などが残されている。

相良氏の人吉荘補任ふにん以前から東方の一带を支配していたとされる久米氏との関連が推定される堂宇があり、本町では明導寺阿弥陀堂、宝陀寺ほうだじ観音堂、八勝寺阿弥陀堂がこれにあたる。



写真 3-25 明導寺阿弥陀堂



写真 3-26 木造阿弥陀如来及両脇侍像

こうした領内の堂宇は、江戸時代になると人吉藩直轄の修理（公儀修理）をはじめ、村（村修理）や地域（所修理）といったさまざまな単位での修繕が行われていたため、現存しているものが多く、県内に現存する古社寺建築で国宝、重要文化財、県指定の文化財となっている文化財の8割以上が人吉・球磨地域に所在するという珍しい地域となっている。

古くは藩を中心に、地域全体でこうした保護に取り組んでいった結果、平成27年（2015）に認定された「日本遺産」のストーリーでもある「相良700年が生んだ保守と進取の文化 日本でもっとも豊かな隠れ里」と形容される特色ある文化圏を形成する一因となり、明導寺阿弥陀堂や八勝寺阿弥陀堂もその構成文化財として、保存と活用の両面で注目される文化財である。

（5）南北朝・室町～安土桃山時代

この時期の相良氏は、球磨郡を中心に葦北郡や八代郡へ勢力を拡大し、のちに肥後八代郡の名和氏や薩摩国の島津氏との争いを展開するようになる。特に名和氏とは、八代郡豊福庄（現在の宇城市松橋町）にあった豊福城をめぐる抗争があり、約80年間で合計9回にわたり所有権を奪い合っている。

文化面では鎌倉時代に続いて仏教文化が栄え、本町では八勝寺阿弥陀堂が再興されている。

また、人吉城の支城であった湯前城は人吉・球磨地域を統治した相良氏の内乱の舞台の一つともなった。

永禄2年（1559）、相良氏第18代義陽の重臣丸目頼美と東長兄の対立にはじまり、現在の多良木町付近で、郡内を二分して戦った獺野原合戦に関連し、当時湯前城を居城としていた東直政は丸目方につき、敗れた後に自刃し、湯前城も落城した。

後に、城主として東能登が一武城から移り、竹下監物が地頭に任じられたが、文禄元年（1592）文禄の役で第20代長毎が加藤清正の二番隊として外征していた頃、監物一族の一人が出征拒否を理由に領地を召し上げられたことを、当時領内で勢力のあった犬童（相良）清兵衛の一派による陰謀と考え、湯前城に立てこもりこれを滅ぼそうと檄文を各地に発出した。

このことはすぐに朝鮮にいた長毎にも伝わり、文禄3年（1594）8月15日、監物親子に切腹を命じた。監物一派は抵抗したものの上意には逆らえず、最後は監物以下2子、家臣ら数

名が湯前城で自刃し、この対立は後に江戸時代末まで続く藩内抗争の主因となったといわれている。

その後も湯前城は、『慶長国絵図』に本城（人吉城）、大畑城おこぼと共に記されるなど、元和元年（1615）の一国一城令により大畑城と共に破却されるまで、人吉城の支城として相良氏にとって重要な球磨の拠点であったことを示している。



写真 3-27 湯前村古城跡図（熊本県立図書館蔵）

湯前城跡にはその後、市房山神宮の別当寺としての起源をもつ普門寺ふもんじが建てられた。普門寺は元々、市房山を御神体（市房大権現）とする市房山神宮が湯山（現在の水上村湯山）に修験道の間として所在していたが、『球磨郡神社記』によると、永正3年（1511）、別当寺として岩野（現在の水上村）に建立された。

のちに天正10年（1582）に5世盛譽せいよが、相良家に対し謀反を起こそうとしているという無実の罪を着せられて殺害され、寺は焼失した。その後、慶長9年（1604）に僧頼真らいしんにより普門寺は湯前城跡に再興され、相良氏は岩野の普門寺跡しょうぜんいんに生善院を建立。盛譽とその母玖月善女を供養している。



写真 3-28 普門寺跡に建つ生善院観音堂 (水上村)



写真 3-29 湯前城跡に建つ普門寺観音堂

(6) 江戸時代

関ヶ原の合戦で相良氏は当初西軍につき、伏見城の戦いなどに参戦したが、家臣犬童頼兄を通じた井伊直政との内応工作により東軍に寝返り、2万2千石の所領を安堵された。

人吉藩では、領地を接する島津氏の薩摩藩とよく似た行政機構をとっていた。その1つが外城制^{とじょうせい}で、人吉城を拠点に、領内には14の外城をもうけ、それぞれに数人の家臣が居住し、領主が領民を支配する仕組みとなっていた。

また、厳格な兵農分離政策はとられず、半農半士の無給郷士が人口の約3分の1を占めていたほか、浄土真宗やキリシタンの禁制を領内で採用していたことも薩摩藩と共通している。

藩の財政については、初期に新田開発に力を注ぎ、宝永年間には2万1000石の新田が開発されことから、財政の向上とともに、現代まで続く独自の焼酎文化の成立にも寄与したといわれている。

この新田開発の中で造られたのが、元禄9年(1696)藩士高橋政重^{たかはしまさしげ}によって開削され、現在の湯前町から多良木町、あさぎり町、錦町へと流れる幸野溝^{こうのみぞ}である。この開発により、のちに「東方組太鼓踊り^{ひがしかたくみたいこおど}」の名前の由来となった新田村の「東方村^{ひがしかたむら}」が成立した。

日本三急流の一つに数えられる球磨川では、舟での遡行が不可能と考えられていた。相良長毎^{ながつね}の頃になると、熊本藩から球磨川河口の八代に港を借り(舟屋)産物を運び出していたが、人吉から八代にかけての区間は狭隘で運行に支障が出ていた。

そこで、商人林正盛^{はやしまさもり}が寛文2年(1662)から3年がかりで河川改修工事を完成させ、このことにより河口の八代までの水路が確保され、産物の搬出入が容易となった。この工事で

降、球磨と八代間の物流が球磨川で行われ、特に木材の筏搬出は、瀬戸石や荒瀬といったダムが造られる昭和 30 年代まで続けられていた。

こうした新田開発と球磨川の水運は、球磨地域を熊本県内有数の農林業地域へと発展させる大きな要因となった。しかし、度重なる球磨川の氾濫と害虫の発生は、次第に藩の財政を悪化させた。さらに、藩主の交代や藩内抗争が相次いだ江戸時代中期以降は、藩内の改革を大きく鈍らせていた。

(7) 明治以降

幕末の慶応元年 (1865)、勤王派と洋式派の対立から起こった^{うしのとし} 丑歳騒動により藩内の改革が後手に回り、目立った活躍のないまま明治維新を迎えた人吉藩は、明治 2 年 (1869) の版籍奉還で相良氏による支配が終わり、明治 4 年 (1871) の廃藩置県により人吉県となった。その後、八代県、白川県を経て熊本県に編入され、相良氏は明治 2 年 (1869) に華族に列し、明治 17 年 (1884) 子爵となった。

明治 10 年 (1877) におきた西南戦争では、県内各地で戦闘が行われ、人吉・球磨地域でも両軍の本営や前線の救護所 (繻帶所^{ほうたいじょ}) がおかれるなど、各地に痕跡がみられる。

また、町南側の山々には尾根伝いに^{ざんごう} 塹壕が築かれ、東側の幸野 (水上村) との境でも撃ち合いがあったとされており、湯前も戦場となっていたことを物語る貴重な遺構である。



写真 3-30 横谷付近塹壕跡調査状況



写真 3-31 採取された小銃弾 (中央は田原坂のもの)

太平洋戦争に関する遺構も近年注目を集めており、人吉・球磨地域においては錦町に海軍の人吉航空隊 (高原飛行場^{たかんばる}) が、上村 (現在のあさぎり町) には陸軍の特攻用秘匿飛行場 (神殿原飛行場^{こうどんばる}) がそれぞれ置かれていたことが知られていたが、近年の錦・あさぎり両町教育委員会やくまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワークなどによる調査で、周辺に設けられた掩体壕などの施設^{たか}について、その詳細が明らかになってきている。

町内でも軍に関係する施設の存在が知られていた。浜川地区にある特殊地下壕について、以前は住民退避のための防空壕という話も聞かれたが、住民の証言から、湯前駅の近くから現地まで木箱を馬で引いて運んでいた光景を実際に見ていたようで、大きさから榴弾砲の弾ではないかということで、その際の同行者の服装から、陸軍の関係する施設であったことがうかがえる。

また、別の住民の証言では、当初は住民の防空壕という認識だったが、全部で5基ある中で、異なる形状のものが1基あったこと、兵士らしき人が行き来していたとのことで、住民用ではなかったとのことであった。

こうしたことから、この特殊地下壕については陸軍との関係を指摘することができるが、神殿原飛行場の附属施設という可能性も含め、今後詳細な調査を行う必要がある。



写真 3-32 浜川区内特殊地下壕跡

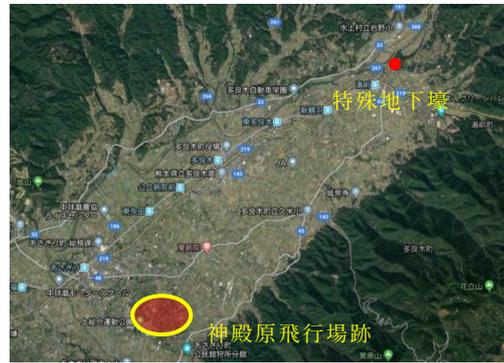


写真 3-33 神殿原飛行場跡位置

交通に目を向けると、古来より球磨川の水運や尾根伝いのルート、各地を結ぶ街道などが交易に利用され、湯前も交通の要衝として古くから知られていたが、大正13年(1924)3月30日の湯前線(人吉—湯前間)開通によりその流れが大きく変わった。

湯前線は当初、多良木を終点とする計画であったが、湯前では古くから林業が盛んであり、その木材集積地として湯前が適していたことなどから、湯前への延伸が決定した。

その後、現在の湯前駅東側には旧営林署の原木材木集積所が開設され、周辺には製材所や旅館などが軒を連ね、昭和49年(1974)の貨物営業廃止まで木材輸送の主力であった。

湯前線は、昭和62(1987)の国鉄民営化、平成元年(1989)の第三セクター化によるくま川鉄道への移管を経て、木材輸送路線としての役目は終えたが、現在も高校生の通学など沿線住民の生活の足として運行を続けている。



写真 3-34 湯前駅本屋 (昭和 30 年代)



写真 3-36 盆踊りで賑う駅前 (昭和 50 年代)



写真 3-35 現在の湯前駅本屋



写真 3-37 現在のくま川鉄道